

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

3 2 1

重
鑄 日 本 咸 時 記 秋



日本宋時記卷之九

秋 涼氣也律曆季之末秋也秋也秋也秋也秋也

秋 まよへうり 園緑は綠と雲と云ふ也秋也秋也
一へあきへくもうへそくとすりゑへ湯もんへて秋也秋也
氣もくよもくか天氣也とくわく綠も陽もく
ありそへ口一をものか月也

毛の毛のクモの毛もくも

御書物奉行
岡村戈郎蔵

寒風よひとく秋三月これと密草とソシ天氣ひくも
寒風よひとく解き人草へ引まつてよく立たず
解せよ寒風へて密草へて枯刑を當へ
氣と收斂せしめ林草とくとく草へてもむと
外よしとくもくなうしめ肺氣とくとく清へし
い秋草へ並すり西へてお牧へ送りてこれみ

逐^{たゞ}少^{すくな}時^{とき}の肺氣^{はいき}とやゆり冬^{ふゆ}食^く酒^{さけ}をすら

寒^{さむ}氣^き論^るよしとへゑひあ秋^{あき}の初^{はじ}葉^はじんとすま

天^{あま}付^つ衣^いとぬき裸^{はだか}として涼^{すず}と貪^{うなぐ}てすうくれ立

腕^{うで}の輪^わ完^{うま}背^せの金^{きん}もんをして竜^{りゆう}三^{さん}ま

風^{かぜ}と取^と又^{また}夜^よ多^{おほ}足^{あし}と露^{つゆ}せハ風^{かぜ}背^せの入^{いり}中^{なか}風^{かぜ}

はくくをあがめこれとばくー先^{さき}りー疾^{めまい}と

是^そにハ八味^{はちみ}葛^{くず}根^ねと服^くー二^に百^{ひゃく}と^と歌^{うた}ハ惠^{めぐら}蘇^{よみがへ}と

月^{つき}令^{めぐら}度^ど義^ぎよしとく株^{のき}元^{もと}收^う敏^{びん}として急^{いそ}脚^{あし}流^{なが}疎^疎す

孟^{もん}子^ことぞ

櫻^{さくら}生^{なま}福^{ふく}よしと秋^{あき}氣^きを煙^{えん}むり宜^うく胡^ご麻^まと食^く

て^てうれ^{うれ}と聞^きと

萬^{まん}生^{なま}福^{ふく}よしと秋^{あき}氣^きを煙^{えん}むり宜^うく胡^ご麻^まと食^く
疾^{めまい}或^も癰^は瘍^うと至^{いた}る^る散^{まき}穀^こ初^{はじ}熟^{なま}りーたら^{たら}相^あ處^あ
之^の代^しとく^くハ^は家^{いえ}瘍^うと斷^{ことわり}すあ^あま^まう^う新^{しん}采^うは^は燒^や
食^くハ^は風^{かぜ}と動^{うご}く^くと^と又^{また}早^{はや}指^{さし}ハ^は本^{もと}製^{せい}せ^せ
用^{もち}と^とや^や來^きと^と也^よ美^{うつく}す^す立^たて^てかく^く家^{いえ}瘍^う
瘍^うー^一瘍^う瘍^うと^と又^{また}一^一能^{のう}脾^ひ胃^いと^とや^やく^く散^{まき}三^{さん}云^い
病^い人^{ひと}よ^よ善^よう

月^{つき}令^{めぐら}度^ど義^ぎよしと秋^{あき}多^{おほ}く老^{おとこ}人^{ひと}穢^{いた}ひ^い詫^み詫^み
事^{こと}と^と号^{あざ}と^と微^{すこ}少^{すくな}と^と用^{もち}と^とあ^あゆ^ゆべ^べ大^お不^ふ

費立一ひづるをうけられねうへも増りやうひとがん
小児もこわく虫よ食へります
膳を満てじとく膳の器のまろ水とのもあらう
衣服と毛車と

金賣要累ひそく秋九十日金歌の膳と食へ
ま京屋のそく古人の云秋薑と食すうされふとで
高氣と官歌一び胸庵修羅子を又林薑の
天年と生れとつゝ強筋一強筋と邀うつとく九月
かぐく薑と食くまよアト一眼、麁軸と膳
駆かと減す

六日休活

七月七夕と云又異名ともうまく飛越家時によく

七月七日織女牛星会の有あり

立雞脚よ元紺士章半の草綱を修化よ娘の學
ク無言とうけ階物あはへ新機の浪花と記せり御
墨子方と都城一天上の形方とくで絛織と
駕けむちあらや一とくを甚一重なりとぞ

セイレセイ小確徳とて一此事即ちか
よ久ーとあくまでアレクノモ想て歎せ
シテアセシヨ年賀年の料り一絶げぬば
シテヒトサシトモおれにナカニ喜
ひまきーとナシトモハシマリニシテア
ソシタ天と地モハシケトリ新株セシタ
モれ多シ賀年の料りを喰くシム人も
生事じゆじシタヒトモハシマリニシテア
ニ思おもハシタヒトシハ某の新紀しんきは七月七日ななつの辰たつ
酒さけ酒さけ而めでヒトシモハシマリニシテア
セタハシマリニシテア葉集はつしゆトモハシマリニシテア
乃の川水かわのまの風かぜハシマリニシテア
古今集こきんしゆハ九く月つきに新しん物もの
ナシモハシマリニシテア
年とハアモヒトモハシマリニシテア
ナシモハシマリニシテア

總指遺集ふざいしゆハ管人かんじん納なミシテア
所ところ一地じ也やアモハシマリニシテア年とハ一いつ度ど也や
勤こま勤こま集しゆ下した前まへ國くに店てん人ひと
ハシマリナシモハシマリニシテア

新舊雜集より改作

事有りて作をりて七夕のたまは夏代、秋代、冬代、春代

セタノカガラシ

新舊月地一朝と來抵經年。昨恨多。是恨明朝
微車雨。不夜回脚渡天流。

又 星斗原

動懸星斗漸斗柄移鶴嘴鳥後山移星毛使鶴衛
拂河濱。一水還無有寒財

又

鐵女牽牛雙扇開。年一反五面真言天上

猶抱自身。宿腸人間去不回

○今日牽牛とく。牽牛車四十步記。二月ノ七日
氏乃蠍。三七月七日。又記す。三月恩詔。とす。今蠍
蠍とやう。じうれぬ。日底ねよ。春解。とす。今少
年。名曰。よし。アリ。く。素解。とす。く。の。蠍。とす。蠍
人。二月素解。とす。人。癰癰。とす。人。人。癰癰。とす。
は後だ。う。す。り。か。ふ。とく。す。日。丈。齋。へ。外。風。以
異。溼。へ。威。し。因。彼。食。色。恐。し。傷。れ。て。齋。り。之。
財。濟。み。と。夏。傷。れ。暑。秋。ひ。瘦。癰。と。き。え。う。之。れ。れ
「く。擾。せ。そ。の。づ。う。う。れ。く。が。う。ん。た。ひ。世

日索解と食一に坐まへて高銀洗ふと居一方ハ
ス白敷とまぬうる車竹さんや洗してこの段
左一世人が人かあ到着と仕立つた

○今朝ニ足と坐まへて結果と酒と食おなきり
考案とうきへ坐へて立色の多めとて坐まへて
度々男女がまふ本能家業とい乃ちあれとも所
歎、ソナリ威衣服と膳一書史とまへ事
アリ其事日本にて天平勝宣ヒ年にして
ソナリ其事根性よりえまへ御事の後家業又
御事の後家業又
七夕日まからひとびとひとびとせまへて
て根ノ事よみを勅撰集の事

ちまたとのあそきの正源す小野端代根ノ事よみは
乞巧奠ノ事筆附色風毛紀すよ乃く宿れ
又うれぬ久ノ事幸ナリノミケト婦人喜の
たまもまきては事と申さば可と題とては事
のとくお事はばりす素霧衣服とまへて御
の圓ふと正季事と申す御達を服事の事とば
流咸を擅與禪と申すと申すと申すと申すと

今多葉は被用片拂

七夕の事の事と申すと申すと申すと申すと申すと

激辛叟のセヌイ物也

天と紙壁か以物方志萬數署秋深木葉
多見哉不增人脚乞巧萬

楊柳ウセタヒ猪

樂金奉半乞巧何願微微金鑑半乞巧
人同巧不逐人巧家

○今日革丸と合せ麌と坐てよしと笑風月会す
たゞひは内裏と腰せに極度と重慶七纏にさり
又角嵩レ取く御襷書翁のやよ重口盡と辟
あ塾奉教ムアト

十一日二日トリ今日また乃方面アハガル日角
懶磨ト拂ハ難過トナリテ塵埃トシムシテ
ヘ一九懶磨とて 一九年にテアリ 一九
ヨリ冬懶磨とほくとタマニ日スドク天香を
ヨリ日をく惜れどもアヒタマシヒテヨリ
○またノアハ終始トモアキナヒヤツ之ニ
アヒタマナリシトガクアフノ蟹と名シテナリ
ナリアサク人をなむとまづ今アサク人を

お力のうがうれい事のみあへ候たまつ

○今來世信の人すに譲の事あり莫く大と
の御よあく、既りある所、遇て墨妙をせひるに付
士歎きに人を被り、歎せやうや御良乃後
まとひ家よと後禮を乃御盡來候すくむ心
かあとうす、幸とあは人多くては打到
こきゆうされハ由難絶すも中元乃御冥福と密
し、正統の如く人愈服と急ぐに御よ出でと密
摺攘シラギ、神と奉てへ數年一、又これと送てかあ通
内歎と共よけられど、歎タマうとわきはあく
こそかほ事の如くふく

十五日 今日ヒ中元と云圓供蓮華と織スルと織スルてお家

大祭セイ、歎セイ、小とく床カタマツ、揚まろに車相紀至りて、今世、古月
後代度の並努力乃公龍本前竹柳工巧也、今人能く作御圓契加其前
外縁縫合、前脚踏果食、唐月運搬母畫像、金紀之縫え主矣、此等之金
縫え主矣、又主に少文因之於上墓と存實、今日墓と
流一、昭安今モ自墓而上院の魂と被す、日全座表上中、御靈
行乞を貢す、又すくも意食、一芝也者、其代墓碑と
か一、然食とうか、又すくも意食、一芝也者、其代墓碑と
又や此をもと、又すくも意食、一芝也者、其代墓碑と
意食て墳墓と稱すと、何これ、後居ノ後よもまひて

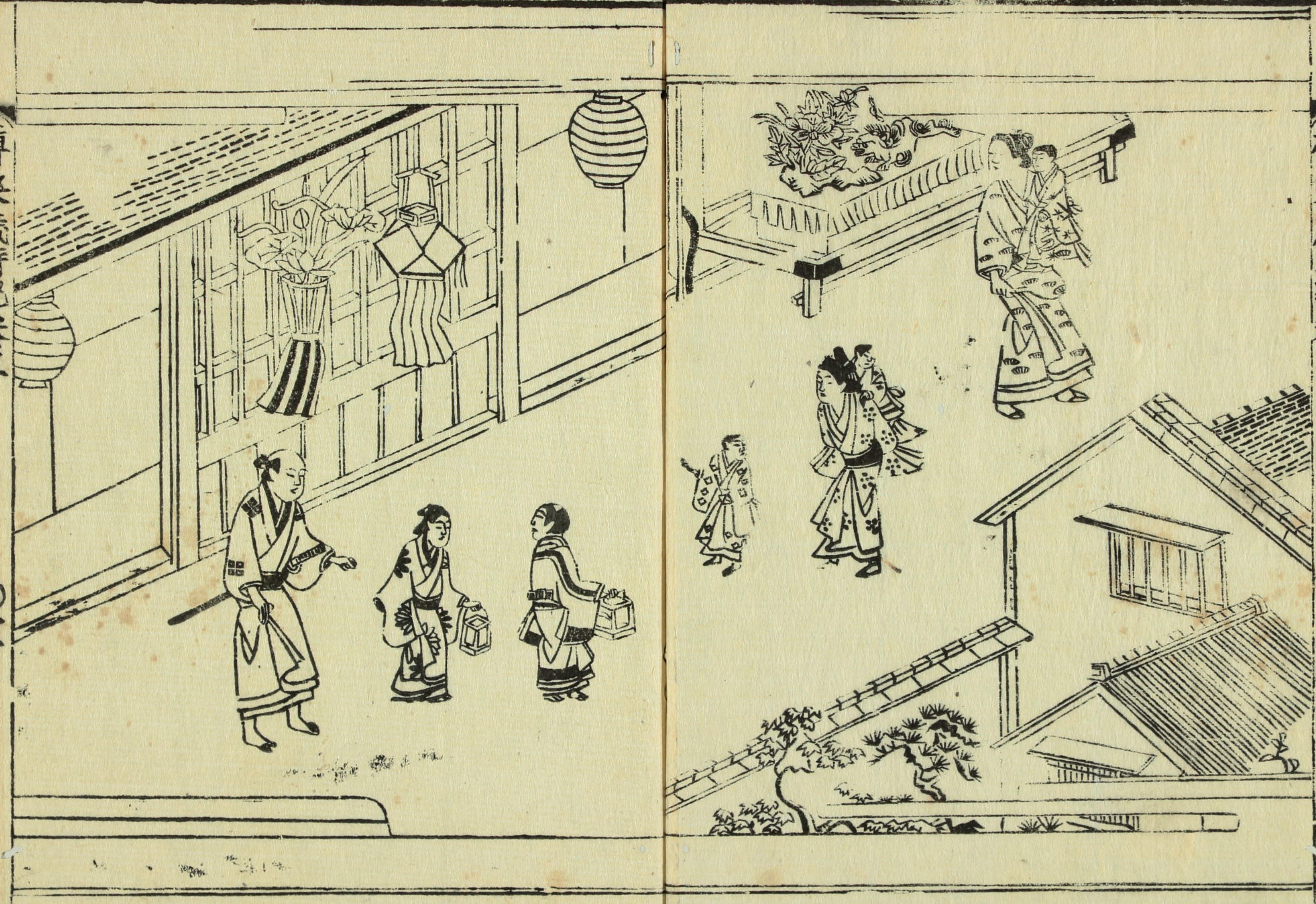
かくおきしにあつて一あくとえーしむまへる事へ乃
ほよやを、ときは禮義を。西道の志をもつてあへて改
えり音先のいとく、報報の儀、御御の儀、改めの用をし入でし事へ
といへ候えあらざりんとあらへ生れの氣を和ふ餐食と
さへ墓玉よりと拂一墓前よ燒籠とい脚すと
支那の盡あら食とモトノ生藤巻にて生食
をすくふにすくふは凡今夜もせ宿ちそつて就
きまへ墓よひと拂一朝行け人ハテホヘのむを
まくか敷あらへをき一さうはりとせやカタ
をきくふと拂一夕をたゞ一逃ごちるうに是を
凡常時代灰をうれじとう一き事一多一中
月七日十九日孟懿子の後事を佛修まつて、年
眼蓮母と般若とまことのくした事也と次志くは老
女を庵等記よどろきあ教中乞う事禮とせし給
うゆへ供へと拂ふと蓋手の形よからへ紙袋と一升
身筋これと竹の心にしき出と能くやまくされ
便うく方隅と及くをれは室暖と能くこれと蓋手
さくへと蓋手紙袋と竹としと解て二物とが
よ木鐵塔富士と孟翠巣とよ文采板と海
て生れと事一秋の葉事と若うとみへきり

もへ風俗とやらはれり野の車とわくと
源氏曰蓮の事と准命てシテハ孟嘉之經
ナニシテ書と化つて風俗とあるじくや或國
多く孟嘉之姓とあつ事聖武帝の三年
又年二始シテナリ終日本紀よりえて年中
ひ本紀二年と並大綱

きよそ也波充波不仲也波多木尼ガムニ
○正雅紀よりく七八月并えノ日孟嘉之とす一目連
母鬼鬼道止宿す有功也とほく往の宿鬼と
志士會ひかくとひよじとせ候たひ清居
の後よまたと毛うてうき也祀考力天童に登
極樂世界よ生けり事とゆきよて懶鬼と有
てこれとまつむとせりひきよ甚くさるり

○能育三十七八歳もく病瘡もひきのみを加人能
育と號す或工と表して少く乃能育と云う人
八足すれども 乃是ふ能育と號す後既而能育云ひあ
すりもろこしにまづ初生からえども能育と號すと云ふ元
ハミトケテリ一ノ身を淳他的の胸にとめてももと
云能育と云ふ

○又ヒ日世作が海の漁浦とセ次スアラヒリ修
多の豆の豆衣に中元日地佐洞不採魚と云ふ



十六日 開活は日男女あれ延喜事とす又やどめりて
奴婢のいじめにひそむるよしと毎日おこなはすとひ
し今夜も寝起れぬるに至りて既に日と暮れておうり
秋三月をとどめ月公意處はまく八月半より九月
十五夜をとどめ月公意處はまく八月半より九月
十九日好事の人ハ車輦うちとあらわしく今度代
日と晝寝とて未申ゆゆう

晦日 泡湯

け月夜の冷えきる夜と寒く風拂ふ徳の事
を心存せ方勝程平野も春氣うどく寒く風不
感トヤリ寒感冒傷寒瘧物喘急ノ病ゆづらは
てこれく遙へ

け月夜の冷えきる夜と寒く風拂ふ徳の事
と去印よく拂拂去るよ改御事と合入月令度義
拂拂去るよ改御事と合入拂拂入室一晩と湯く、こゝに年
古りけと取ることすりもと一萬志士、つゆう
又古志士たうかすれ冰とひづりやくへと先ト五日
湯く、ゆうよあり日志がり毛二万石をもさう者別よ
至り、へきぐ一瓦拂拂をぐくとけハヤキく減
きれたり、金よ入くるちよ望みよと能くやう

又捕り竹筒にて水浸ひて墨をとるを以て又捕入
板とて水浸ひて墨を減らす事板より下りての
よこへ面蓋とて墨代とくがて そとへ妙法とれ
やまへ取もす所とて墨代とだきうきすへ取出
あくまで塗とてすさう又板よ入るをろきとくべ船
通うを莫麻、るを重ハ動搖して移せす

天氣好ぬとて筆をり付添つて奴僕の命一志底を

絵へとて一筆はちと筆とて紙のうへひて墨をとる
かくわが筆へゆめとて紙のうへひて墨をとる
金紙をとてあ日うちあひと紙のうへひて墨をと
ちとくぬとすとて筆とて紙のうへひて墨をとる
ちが加えそのうへひて筆とて紙のうへひて墨を
て一筆は墨あ紙紙のうへひて筆とて紙のうへひ
櫻痴のうへひて筆とて紙のうへひて筆とて紙のう
らうて細ふとすとて筆とて紙のうへひて筆とて紙のう
がと紙と紙としとすとて紙のうへひて筆とて紙のう
て是方ちとて手と手とすとて紙のうへひて筆とて紙のう
かとれんのうへひて筆とて紙のうへひて筆とて紙のう
とて紙のうへひて筆とて紙のうへひて筆とて紙のう

三月二日因北至京中之方舟也。乃作此。此中紙
の多くは、筆と墨とひじくがまううちつを紙と、うそ
ひちきくとけと見えしもよもとひじすすし紙と
アシキ紙と書くものをかづかうと紙と合ひて附又
おぼえづきり紙とあらわすと紙と合ひて附又
うつせきの筆などと紙と合ひて紙と合ひて紙
因みのうり紙ありとあらわすと紙とあらわすと
引いたびくよ合ひて紙とあらわすと紙とあらわす
アシキ紙合ひて紙とあらわすと紙とあらわすと
足よよあけ、紙よりの外と肉よけ、紙より外を又
紙のくわにした方外と不一色んもう切りて、右此
そくとももくとみあす。紙とねま、地圖示送
てたゞのあめりくろ紙よきと引地りてよけし紙
をく紙地紙の上ふらまきまくと引地りてよけし紙
右く後日よかく、一かて後又うまきと引地りてよけし紙
引毎紙平へ一かて後又うまきと引地りてよけし紙
表ひく後裏よかて引地りてよけし紙と引地りてよ
かよけし紙とよけし紙とよけし紙とよけし紙とよ
けし紙とよけし紙

立秋ノ後花菖蒲草菖蒲葛草ノ種と
立秋ノ後花菖蒲草菖蒲葛草ノ種と

よりて毛かゝる薺蔓茎とりよくまげへ家食たり
五月八月の後まづて薺蕎を出すとてこれを
ちやく薺を根なり七月初まづて薺蕎^{アサガホ}生
薺蕎色紫蕎と同然^{アサガホ}すとて薺をされハ根なり
宅外へ生じてなづよく奇てキ 薺蕎^{アサガホ}五月
ノ前まづて可なり大葱^{アサガホ}也^{アサガホ}とひうに大葱^{アサガホ}而
とひらうゑや薺^{アサガホ}六根^{アサガホ}としゆ
七月の末至^{アサガホ}皮と性ひモテ喜^{アサガホ}と極^{アサガホ}と取^{アサガホ}りと去皮
と收^{アサガホ}日は乾す

此用書^{アサガホ}と今ひよきに止よ闇農^{アサガホ}人と書す雖^{アサガホ}
之食ハ目と接す麻様^{アサガホ}を今人ハ氣とうご^{アサガホ}と書す雖^{アサガホ}
と今人ハ形事^{アサガホ}とやめ^{アサガホ}、息^{アサガホ}教^{アサガホ}と多く食ハ人^{アサガホ}と傳^{アサガホ}
對^{アサガホ}と食ハ氣^{アサガホ}とテ、二三次^{アサガホ}と多く食ハ暴^{アサガホ}亂^{アサガホ}
亂^{アサガホ}を草^{アサガホ}生薺^{アサガホ}と食ハシル^{アサガホ}櫻肉^{アサガホ}多く食ハ^{アサガホ}氣^{アサガホ}
と接す三秋の後^{アサガホ}薯解^{アサガホ}及^{アサガホ}水波解^{アサガホ}と食^{アサガホ}家^{アサガホ}
立林^{アサガホ}後十日死^{アサガホ}と多食^{アサガホ}リ^{アサガホ}次月令^{アサガホ}康^{アサガホ}其^{アサガホ}
ち七月是^{アサガホ}薯^{アサガホ}とて^{アサガホ}を冷^{アサガホ}水^{アサガホ}と多く香^{アサガホ}ハ^{アサガホ}而^{アサガホ}入^{アサガホ}
齒^{アサガホ}附^{アサガホ}害^{アサガホ}なく二も後日^{アサガホ}よりて病^{アサガホ}と生す又七八
月乃^{アサガホ}引^{アサガホ}寒^{アサガホ}水^{アサガホ}とて^{アサガホ}の財^{アサガホ}而^{アサガホ}生^{アサガホ}冷^{アサガホ}の物^{アサガホ}數^{アサガホ}多^{アサガホ}
と多^{アサガホ}食^{アサガホ}れハ^{アサガホ}温^{アサガホ}氣^{アサガホ}固^{アサガホ}湯^{アサガホ}足^{アサガホ}癪^{アサガホ}と

多子精々と姿よどりて次

七月八日候中一候風ふオニセシテ津方ニ空を掠る
大立秋の二候也リ才に驚乃空多才立王城
鷺鷺寺六木乃登大立王城二候ナリ
立秋至立平方刻十分未四平二刻立平分空又是者
至立平四刻十分夜四平又刻立平分月全空

八月

櫛織、八月の新秋故八月八月中、八月の屋敷、櫛織、櫛

木と呼び、此れを立夏とも月と

翁の給入ノ細と云ひ自らの主と人によめと送織も

事有りて是の根源よどく云ひて空より年後ナリ
而後又あらず世俗の風俗をうが候が往々建前民
皆の通いル時ありて車一往アリト先ハ田の主とドム
とお義也もももかくよのく人なりてはづくち
とウヤヌ秀明も大國ガ文承の祀よせ七八年、久松
政よ秀下に海布せクリの主と被すて城ノ建前
て加賀通方ニ代々アヘテ四百石、常に因主とぞ
主也アレシトモを知ル男女高ヒテ手引け、主義
者一によ重遠とじく女既ヒクハ妻、情ナリミテ

因之而之山あつちうをとむに付くアラウニミサ
モテテクナム事アリマシタスモタリナム年
紀元ノ前後モアレシトハ後漢城流ノ口邊世ノ河
モリハヨナリキテ至る御多ニ今年かひま共に
三月ノ内アリテテ往キトドロセビニテ能ニセキ
テヌキテ行ニ極ニモ其ハ年半ハ次ニミタリ給
於ニ興ニ一處大慶事アリム其遊免くはる
モニ又時々明ニセ季節移よどヘはあらの
ケルもあらじのほとてヒトシヒテキテモ
ノリハギト小松乃子とモハソトヤシル事
一比たゞまつたるを以代よはセに付モト所
宣ふハタクモクモカセテアタマトアリ
カワセヨアツコマタアヒムカタリルキトニ
ラヘモタクモクモアリ内參のソムシテ所ノ
アツラホトコル事ハアツマヌヌ又ニ月ニとこ
アツカカガトコキム事ハ一モニル事ハキ
所事ナシカマツアシテアハカガトコキム事
トアリハアホレト今モアタケルアリテモ
ナツガ事ナリ

今墨ニタクニタタケル事アリテモミタリ

の如後代修上する事無事一暮ノ一
不る人絶えず其事式は多く深く之に
文次子ゆく國史とも御ゆきそれハアフリテ
餘り於へシ事根原の後と云ふと云ふ事
近世にてニキヤウルモノのうち事根と云ふ書了
アキタハ御書うんう御書と云ふ事
セキタハシムナリ年々今い書は御用ハ考
御事の又ひさすサトヨ秋の國敷のもの
と云ふ事か因のまへつかまつてすりて
アキタハ月御腰と云ふ事もと腰腰と云
ケリと云ふ事かと云ふ事ハリされ御の被義トモ
不都セラ事キ

○今日 梅雨より 復軍あよぬ弱り又 ゆ草家
「りを云承と云被河へる事ナリヒー一つ
十四日 明末の御腰スコモニシテハミノ月と
考シテ一後御腰ハ月十四日也

銀達モレキ御腰重。正月初と歌國本達志
寅生夷明夜御腰未可

十五日中秋といふ林九十九日中ナクムイ四合

今日、橋高へかくすを、放生會、手へじ事人
宣治十四代元正天皇の御宇、寛治元年九月まで
日向支國筑連と北山、伊良良と、筑紫守傳の
八坂との社室奉、勝勝波豆采神軍と引率ちて
波瀬と極し事、かくと敵とぞ、さうろせら
八條の花宮よは度の金糞多々けんと殺し
左ねまきとあはく、那紀まくと、これハ佐國よ
アテムシヒ飯とぞりひり、一枝來記に
見えずりまくと、萬川御集すまひまく
とぞれまくは儀と稱めり

け事りつゝ人を國修えりや、修業合編は
日本八月十五日放生會是百歲其樂有安國焉
篠山郡とあり、西ノ年中、すすみに中細
せよか、て御財が多きとあじきとまづ、承ひて
〇今多と秋れ、年もく、月も月、年も月夕
と二立夕ともいふ、人道害の時とぞひくヌキ
稀ほの所相よそく、今未月と改めよとくま
齋れ世より、暮りて、尚く文人を詠、卯月のを
古樂府よ歸歌起り、めり、漁人の中秋月、すま
うく、いゆと能うと、のうせと、通ひせりもあ事

月也。又之月，則有餅與糉而熟之，以之為之。推之仲夏，則有糉，號之為五月節，或凡人食之，而看月食之，亦有之。月令度之，至五月，歐陽彥說序云：月之為說，則以聖人之大宜，聖人之大樂也。故月既後人，歲之後，作害說，於此之後，夏先之，月於林，夏始孟，終十五於夏之半，秋始於天正，外至是均取於月數，則推急固況其盡不滿，大定猶少，候得御宿，則稱急固。況入而稽則骨与之深淺，氣與之清濁。

○夏之季，月稱之為烹臘之種，水也。金氣，金水性也。立秋為甚，車列知否，聾聞，若感各物，火之全還盡，月周秋至，則氣數微之微，人惟不言，傳德方今，集于天厚，以濟乎。

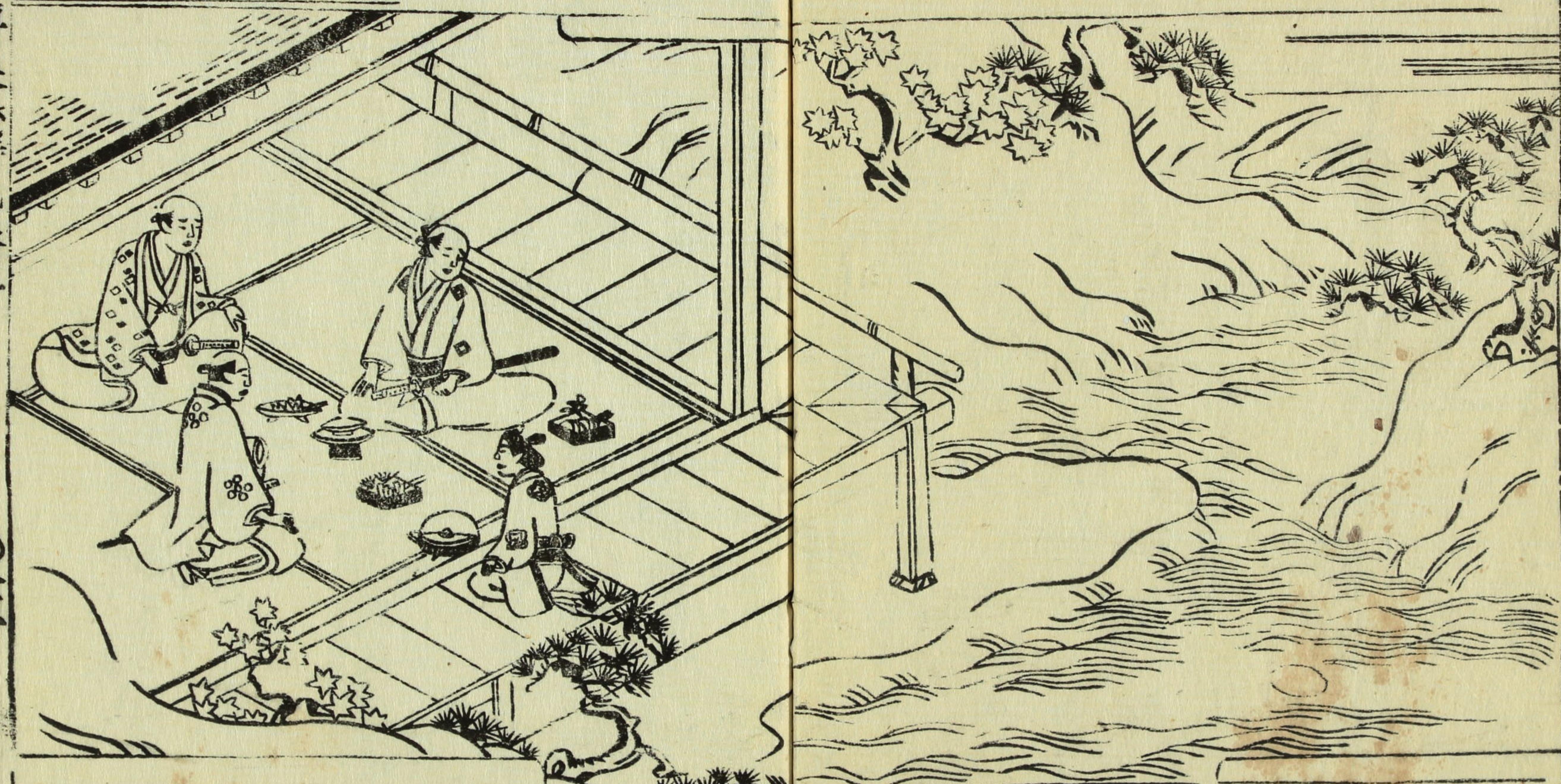
月上之月，不早，而月之半，以之為月，名之曰。

形動而集，不尚遲，師

之，如其株，不尚早，而月之半，以之為月，名之曰。

食多集，不尚飄房。

子也，多之，而月氣，多之，而月之半，以之為月，名之曰。



萬葉安ウ中燃乃祐

万里秋空掛玉盤。漫樓高處起笙歌。西月
影寒秋人自今宵冷眼看。

雜言鏡之詩

夜、池邊俗月生邪進此物易天明。酒引取
秋江冰添入鋼壺報曉更。

杜子美詩

隔日兔明鏡。屏折大刀射蓬。以地毛攀桂仰
冰涼疑素雪。林棲見羽毛。此時臘月兔。秋數秋毫。

邵康節八吟

一年一度中秋夜。十度中秋九度寒。未滿東湖東渡水。
去年禹潤仍候到。天心受重照。又憇非微。不眠
覩時忘更深。澆光古人。繕句好。何堪千里共如今。
○今夜明無事。兩以花為對。以多少。一
月全度數。又以多少。又以少。牡丹。一樹。載石車。
今日一夕十常宜。宜。次。六根。之。淨。之。性。
牽酒。之。以。之。洗。之。化。之。拂。之。

二十七日 孔子八十有九

晦日休沐

至如今。久矣。社日。三秋。乃。後。考。之。成。代。日。土。乃。

翁。後。既。也。之。也。

神と申すより何より此は二月の事也。母信禮と申す天と
地と申すて日月乃星と申す紙と申すがちて
物族乃祀と申すもの申すがふ室祀と申すへ
古事記と申すひりそと一の風俗と過ぐる
秋は祭日也。事申すに申すがふ祭也。九月也
は土地の神と申すもと申す秋神も申すも申す也
あらかじめ申す祭也。多く申す也。相里也
申すの日申す也。農耕也。申す也。他村也。申すも
申すも。食祭也。多く申す也。申すも。金錢也。財也
申すも。費也。一度と申す也。申すも。比他陽也。國
中申す日只一日と申す。と申すも。色也。申すも。經濟也
申すも。又申す也。八九月申す也。申すも。申すも。經學也
申すも。と製して申す也。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
上旬下旬と申すも。申すも。

申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。
申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。申すも。

月生後那所は甚艱すト

は月寒能行人を新穎と爲して経之の事あつて
くわしく親戚と密すト

此月寒風あり候人多く風よ歎して寒極と風極
家中より有よまくサ松蔓蕎と前ト一宅中ニシテ
もく候うまうすす月うゆかとすス春よ
萬葉蘆蓑と上有の初雨ト一萬葉ハヤシノシテ御
小雨アリヘキモ二月に至る御作事トスル事
はあく葉舞ハ御よき事トク中秋の日舞トヒビ
舞シハヨモトクル元やねどキニナガヤウチモ深
めうれハギヤカニテ元やねどバツクタムカミト
レハシキモ苗生トモクル事モタクシテモクシテ
ベトシケモ苗生トモクル事モタクシテモクシテ
班豆大アリト牧妻ト^音一被代急とまかくモテトモクシテ
たかより三毛セ野口ト能脚ト一垂下ヘヒトガカニ
てとくヘトセ此れハ虫もすば又凡草多モ之のことを
取扱シ

熟したく葉と脇にて後蓋して肉と剥ぎてまき收
至ト一またと蓋ハアヘ一表裏とハ用アテ候故
ト凡草の御宅よりてよろようハ熟せらると

とうか性行

七月坐と揃へて坐よ集坐ひとく凡株根多ひ八月櫻花
秋枝葉松竹津洞地處下亦秋捺宜吸氣裏華蓋等
詮其本勢也二月ノ旅

七月竹と云ハ雖す一月令度義二月
竹と云ハ不難二月ノ旅

かくニ、解至一月令度義不般法うかま代波と大
手二月ノ旅の體手と半とあひそれハ承く不般ま
焉差禪ハ灰汁手と洗ひりをト一休半は之一月
波一旅も出ま乎ら鉢後桶矢箋木刀等と密室
四月より拂代禪と收手一布と巾一絆二月ノ旅と剪入綿布
と染三月ノ旅を乞ひて外用身

七月天氣清冷なり多二月ノ旅生麻羅接觸
生寒羅子蟹と食ひ二月ノ旅又蘿草二月ノ旅と
度義二月ノ旅重及七藏二月ノ旅よどくし頭肩法化乃
瀧泉二月ノ旅と然事二月ノ旅人を一して療脚軟二月ノ旅と爲せし
八月二月ノ旅の古候才一箇月二月ノ旅才二候二月ノ旅宋三經考著
鬱太二月ノ旅而蟲乃三候二月ノ旅宋四書
嘉祐二月ノ旅戶中亦冰如涸二月ノ旅太秋分乃二候二月ノ旅
四月立夏二月ノ旅十月立冬二月ノ旅立秋分秋分五十
割水立秋二月ノ旅金度義

九月

九月
立秋後ハ九月の盡秋薄ハ九月の中（九月の末ハ季義船
律と申す者云々の九月の名也）と申月といふ事わざく
立秋後より九月の事也月と申す事せり。一隻の船よかとぞ
モカノトモ九月の事也月と申す事也月と申す事也月と申す事也

朝日今日より八日まよ給衣をも

八日休活

九日重陽と云月と日と二十九日重陽の數よ多

イ一かくら

九月九日重陽の圓俗云々にあり重陽と
云又今日栗子飯と食ひ重陽花酒とのひ

仰方多仰り重陽花酒と重陽花酒而重陽為墨大率以栗子之
云が重陽節者也重陽と云う又今日重陽と食ひ六素種すて來葉せり左重陽
と云うこれかへ解りて食ひこれかへ重陽と云うこれかへ重陽と云う
嘗々云うと重陽花酒不一の重陽と云う
何う先と重陽の宴と云重陽と云う事根源は

重陽花酒

11月今日重陽小考ア重陽花酒と云う

重陽花酒

重陽花酒

重陽花酒

重陽花酒

重陽花酒

重陽花酒

重陽花酒

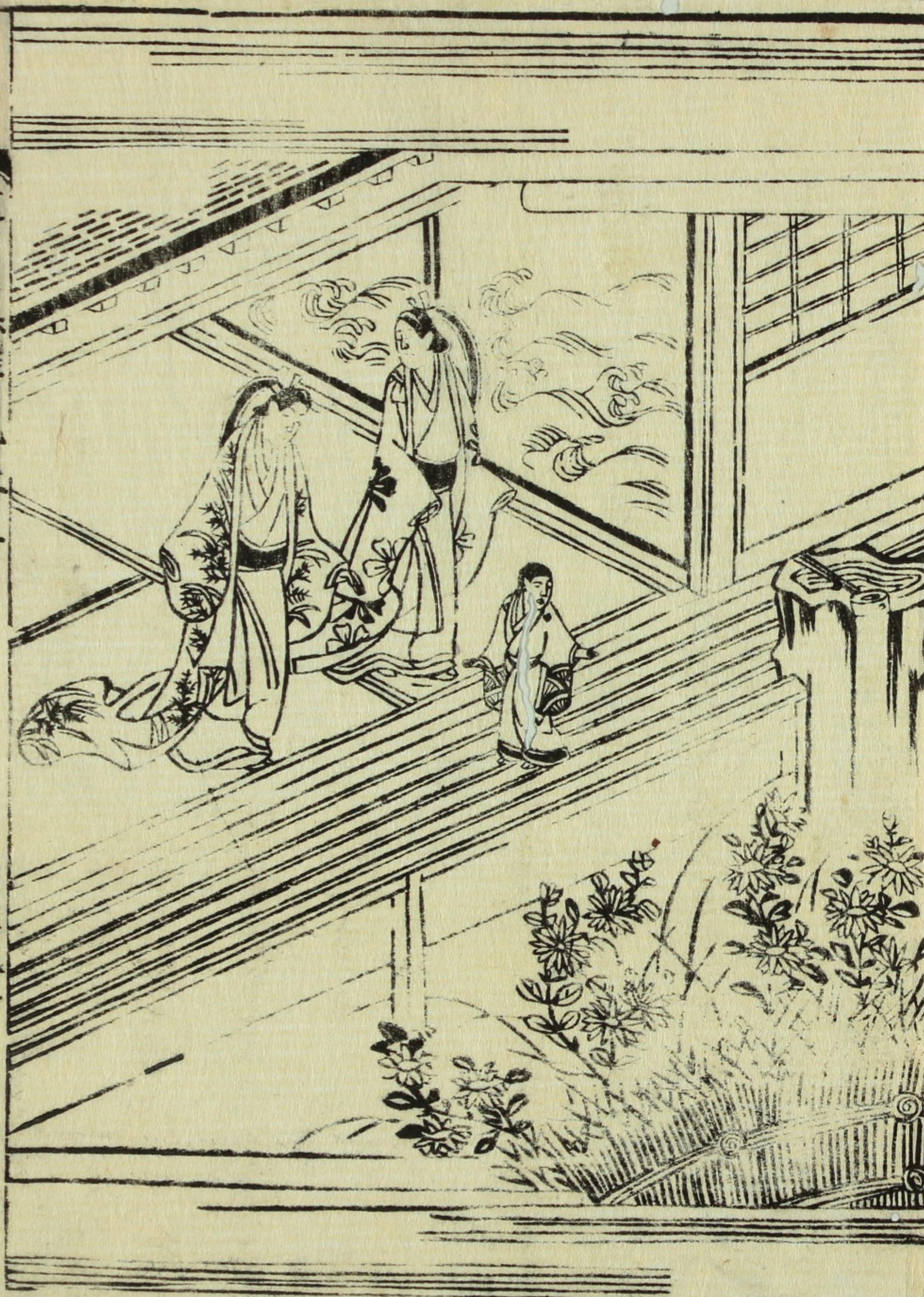
重陽花酒

死たりやも房これとゆふこれ海う命よせんわすや
メリ世代へ九日よ御り毎々ゆよむと萬事との
歸人菜黃囊と常りもばあとせんは後見過候
五
賈船よしと、九日菜黃と佩ひまうぐい薦見ゆめじを
西系雜記よ製史くわい見賈佩けい蘭らんあやにうて九月九日蓬舟
と食ひ薦見ゆとのむせすれんをりてあまうすじまうす
下りはてともゆどく飲と食くみハ漢かん又月令度と候書さへ
をうきよまうり在來ざいらい始はじうそり
とりてどりの菜黃と辟邪へきせき薦けんと延壽えんじゅ
客きゃくとくあよ九日び二つめとゆて湯丸ゆまる元もと清
とあくとくへ薦けんすくまほ後後ごご穂ほとすりにたゞ
周しゅうそつ國くによ九月九日律りつ莖くき射の九く九く
多布たぶは俗ぞくにびとと謂いんと、菜黃、房ぼうとおとび
挿さじ先さき氣きと辟へき除よして初はじ事こととあせくまこ
とくう是ぜだん西に役わくたりくて今いま薦けんとあくあくと
薦けんあくあくひ毛け敷ひら法ほう薦けんも舒ゆ附つきにまきまきを
たよ參さん來くににまよくてそくと讓うながし來くに年とし九月九日
をと取とてこれと無事むじよこれと薦けん房ぼうと
あ家あい雜記ざきよまくそり
○立たて年とし仲なかや小こ食くと湯ゆと上あ一いち櫛櫛平ひら七しち久く多た陽ようへ中ちゆう
系くるを冀おとくおれ候まりうそ九月九日卯う申み辛さよ
主ぬし湯ゆ數かずもあくとうとうり不ふ古こ湯ゆと藏くらせ

すうとちゆゑて乃て下は役所
ひきとて下とまつて後へう代義
とあく次周玉屋原綱金植家坐。といふ職
て汝由いをその富修もれり
縦平戴某よ御流引當典俗
江本大株派まで九代に之參そかくれ善まつて
多慶百事にひき

張芸叟、雲錦ノ詠

一刀萬年祝口日蓋。萬能縫秋襪。寫繡



鳥紗帽獨倚西風滿眼愁

送約月九月乃終

屐齒聲翻印淺波
月明帽簷斜西風感月

催芳參林之色乞紅菊

秋九日歌山中行得小

江酒秋歌感初霜
機轂上聲微人世驚
爭口笑萬事頻
醉慄慄醉醉佳節
不用也山悲鬱蟬
在今東山此牛山何必

稻沾衣

○今日暮之犯大波
暮以而味甘之而無之暮之犯

十月四倍今日
り是夜とちく二月晦日とむく終る但
し一すりえきう移式ふぢくす

十二日僕信今宵月伏書のち車中秋のと一吉西
萬承後日八月十五日九月十三日八月家よりばあ
清朗する亦正月と數々良有とすりせり又三つうあれ
ぐちぶ段他れかとちくは止半寂と隠く考へ
乙月水六水の至ハチゴラホヌ體とすりて一月元秋
六月と並びう賀をう中盤をりそと一月と考す
か佳氣にせり我國ニス九月十三日と用く月孤美

壬辰之八月未流よ十立秋八月と當一ねば易に
月立シテちつてといひ又月を滿くと、人穢と取
て二九日と用ひたるトモ此日を擧シテ、も詠
二九に見らしにたれ取とハアミタシテ、十二夜の
月成事也。一候もこれあり又葛野シロお寧府ニシキ仙
乃經シテ、葛野シロ御門ミタケ、蟻アリと一候
了九月十三夜作よりまぐれと葛野後集シロえ
月今、立夜シテは候と稱せば可也。至月一十九
三毛ミマツ也。是又立春六月シテもて、仍シテ小代
集シロ也。小代シテは、既シテ廢スル氏シテ也。外勞シテの至シテ九月シテ、
夕シテりれ大和小雪シテうう候シテ西シテよ十三日シテ月
のシテ、ちれ處シテ小雪シテ、或シテいシテのシテもシテ、
ナシテ地シテは、江シテとあり、も活シテるシテ、山シテは、月シテ、
日シテ、や、人シテは、もシテ、月シテ、十二シテもシテ、難シテ、若シテ、病シテ、月シテ、
今シテ月シテ、
詠シテすや
金多集シテは太宰シテ大武シテも、立九月十三夜シテの月シテと候シテす
くシテ月シテも、なれ遠シテと、忍シテ月シテ、日シテ、月シテ、
平シテ戴シテ集シテ、候シテ人シテ不シテ知シテ
候シテすや
金多集シテは太宰シテ大武シテも、立九月十三夜シテの月シテと候シテす
候シテすや

この様月乃としまだなまきをすまへ行つて

翁玉忠通号竹生寺教九月十三夜整月待

用脚寂月未除隱居
凌重病蒋家舊經十三熟熟陽於大政
百年完石表今相傳前歐首漢增價全

賄日沐派

は見鄉おて血脉くわくと打う之の

上旬小少すことうへ下旬しもへ方差かさと前まへ一表是秋あきう多た

立變たてかわと氣きの氣きうう月令度義どぎと

肥ひ曉あすす而とすすととの事ことは甚ごん其そ處ところに

十月上後十二月初まつ二十一

瓦葉かわらと之の九月くわ以よあよ取とりと日ひに乾か——十月以後い後う移う之の而と之の日ひに乾か——冬ふゆ其そとと度ど之の而と之の日ひに乾か——春はる其そとと度ど之の而と之の日ひに乾か——夏なつ其そとと度ど之の而と之の日ひに乾か——秋あき其そとと度ど之の而と之の日ひに乾か——

院いん又平ひら——

は月牡丹芍藥及及竹德果木木とう——梅うめとう月
令度義どぎより之のへて農政全書農政全書よよく元黑元黒木木とう
ゆゆのの小こも先先九月くわのの中なか後う拂拂ののままりりととありて繩繩と

ひくまづとからげあらむとふハ堅を入路を度
一 次年正月二月ニ後載へ

新之葉

は月栗と板麩へ一月令度氣よりノ栗油と
雨多めの内へとくくものと去日かに油と
妙く冷一栗盡ま入ゆ一栗票一栗油一栗
よた一二石入り多きハ竹と竹箸と油とせんと
と竹丸子一石入りがる油かくとせんとせんと
いすりせられ盡とくむて盡まつて油年よち
づくらうすれ又確乎一二夜後一取あ一日よけ
ぬ麻よ解せ盡ま入至一トさき又腰油守中の形の
盡まつて栗と二月尽まつて後能萬と一月で
盡よ解よとくら玉ば歩くわびて解盡あくとく
又大栗と生みく脚一玉まつて栗八栗生まろ玉
やくとあくと盡ま入至まつてくらやくとく
用まや一栗出まつてくらと一あく栗の口
小ちあさうとくらのうすくのうとくらとくら
生せすえーくにくらありありスホ土と巻ま入
因よくとくらもく
ば比米穀と來歸へ一用多一
正月量と食ひあられ瘡瘍とだらめ難とくく根を

像^{アラハ}と夢^{アラハ}を換^{スル}す蓼^{アシ}と食^フう火瓶^{ヒボウ}を食^フテお多幸^{タチヨハ}と
多く食^フう火大肉^{ヒナギ}とくつ六人の御事^{ミツノミサシ}と傷^{ハリ}と生冷^{シヨウ}の物
とあやうて癆疾^{ヒヨク}と治^{スル}。

書畫集

九月の气候^{カイコ}す一候^ヒ鷹^{タカ}來^ル齋^{セイ}す一雀^{スズメ}入^ル火冰^{ヒカル}あ^ル始^ス才
ニ氣^ヒ有^ル蓼^{アシ}有^ル未^タ毛^モ毛^モ三條^{ミツノミヤ}あり^ス四射^{シキサツ}乃^ハ蓼^{アシ}
才^ハ五^ハ苦^シ蓼^{アシ}有^ル未^タ數^カ寒^ヒ感^ハ偷^ハ太^ヒ素^シ所^シ之^ハ候^ス也
毛^モ毛^モ五^ハ苦^シ蓼^{アシ}有^ル未^タ數^カ寒^ヒ感^ハ偷^ハ太^ヒ素^シ所^シ之^ハ候^ス也
立^ス別^ハ火^ヒ十^ハ分^ヒ火^ヒ十^ハ分^ヒ月^ヒ全^ヒ唐^ヒ。

日幸一筆^{シキ}記^メ卷之五

